WARD ウォード
World Association of Representatives for Descendants
世界子孫代理人会
to descendants

地球温暖化は止められるか

HOW CAN WE STOP THE GLOBAL WARMING?

2015年11月30日からパリで開催された気候変動枠組条約第21回締約国会議（COP21）は12月12日に「パリ協定」を採択して閉幕した。この協定の主な内容は、1）気温上昇の目標を産業革命前より2.0℃未満に抑える。2）全ての国が2020年以降の温室効果ガス削減目標を国連に申告し、国内対策に取り組み、５年毎に削減量を増やす方向で見直す。3）途上国の気候変動対策に先進国は支援するというものである。

この採択を今世紀末に生きる人たちはどう思うだろうか？現在の気温は産業革命前より0.9～1℃上昇していると言われ、世界各地で深刻な気象災害が起きている。2℃上昇したら平安な暮らしは難しい。しかも拘束力のある内容ではないから2℃で収まらない。パリ会議の約束草案の削減目標を達成したとしても、地球の気温は2100年までに2.7℃上昇するとの指摘もある。地球は共有のものであり、今を生きる人達だけのものではない。子孫の生きる権利は蔑ろにされている・・・と失望するのではないか。

人間活動による気候変動の警鐘が鳴らされてから半世紀以上になる。1972年に「かけがえのない地球」の保全と向上を目指して国連環境計画（UNEP）が設立され、1992年に気候変動枠組条約を採択、1994年から締約した国の代表が毎年会議（COP）を開いているが、温室効果ガスは増加の一途を辿っている。世界機関は「未来との共有」「持続可能」を謳って、世代間公平の概念を示しているが、不公平になるばかりだ。

これは現在対未来の平等問題でもあるが、未来を奪われている側からの主張や要求がなく、未来に及ぶ「縦の平等問題」として確立されていない。子供やこれから生まれてくる人は声を出せないし、未来を奪われている若い大人たちからも「私の未来を奪うな」という声は聞こえてこない。今在る物を今居る人で分ける「横の分配」に明け暮れ、自分の未来をも食べて生きている。男女平等や人種平等の様に当事者からの要求がないまま、未来はどんどん奪われている。

最早、子孫に残そうでは残らない。未来と共有する「縦の平等(Vertical equality)」を掲げ、「残せ」「未来を奪うな」と迫る存在が必要である。具体的には、大人たちが子供やこれから生まれてくる人達を代理して、自分も100年後に生まれてくることを仮想し、自分を含む大人たち、時には国家や世界機関と対峙して、生きる権利を主張し、未来から問題を提起し、解決策を提示して、改善するよう要請する・・・そんな地球人の集団をつくろうと1992年にWARDは設立された。

この「縦の平等」運動は、要求する側とされる側が同じであるから、子孫を代理する人は、先ず自分自身と向き合い、子孫の視点で自らの生活行動を改める事が求められる。私達人間は、快楽を求め、刹那を生き、臭いものには蓋をし、いやなことは先送りしがちである。この環境破壊の元凶とも言える「私」を「縦の平等」の自己訓練によって「子孫と分ち合う人間」に変えていく必要がある。先ず私が変わり、周りを変えていく。一人一人が変われば世の中は変えられる。

こうした人が地球上に増え、活動が盛んになれば、未来までも視野に入れて判断する「時間の物差し」（時間軸）が広く使われるようになり、不都合でも先送りし難くなる。例えば、原発に100年の物差しを当てれば、子孫への犯罪だと分かり、廃絶へ向う。炭素社会に50年の物差しを当てれば、限界が明らかになり、水素社会を目指すようになる。

COP21の合意で、世界は温室効果ガス削減という目標を共有する事が出来たが、スタートラインに立てた段階で、これからが正念場である。どうすれば達成できるかは分かっており、技術もある。しかし、実行は至難である。経済優先、社会のシクミ、ライフスタイル、炭素社会の既得権等の壁を乗り越えるのは容易でない。

前述した通り、残そうでは残らない。減らそうでは減らない。未来に配慮する優しい情緒だけに頼るのではなく、被害者が生きる権利を表に出し、減らせと迫る活動が必要だ。パリ会議では、大きな被害を受けている貧しいコミュニテイの主張が人々を動かした。これら現実の被害者と共に、これから苛酷な気象の只中で生きなければならない者たちが手を組み、「炭酸ガスを減らせ」「我々の生存権を奪うな」と訴え、一方で、加害者としての責務を人一倍果たす、そんな人が増えたらと思う。

未来に希望がなければ私たちは幸せにはなれない。青壮年者は自分の未来を守るためにも、幼い子を持つ親は我子の未来を保障するためにも、高齢者は孫の行末を思い、子孫に代わって声を上げ、自らを変え、連帯して世の中を変えていけば、「持続可能」も夢ではない。地球の修復と汚染のバランスが崩れてしまった今、私達人間は自らの種を存続させるためにも、「横の平等」に終わらず、「縦の平等」運動を推進する時と考える。

WARD会長　渡辺英男　HIDEO WATANABE

+6℃—地球温暖化最悪のシナリオ

SIX DEGREES・・・OUR FUTURE ON A HOTTERPLANET

昨年末パリで開かれた国連気候変動会議では今世紀後半までに二酸化炭素（CO^2）などの温室効果ガスの排出「実質ゼロ」にすることを目標にする国際ルールが採択されました。つまり<気温上昇を産業革命前と比べ2度より低く保つ>。それには温室効果ガス排出量を50年に10年比で40～70％削減することを達成しなければならない事らしい。それに基づき、各国が自主的にその目標に向かい、達成に向け国内措置をとることが義務づけられた。京都議定書の“目標義務”ではなくあくまで“自主的”となったことで評価する声（特に経済発展途上国など）がある一方、実際に現実性があるのかの不安は拭えないかの声も上がっている。

そこで、もし目標が達成されず地球の温度がどんどん上がってしまったら地球の表情はどう変わってしまうのか、そんな興味がある方におススメするのが表題の書籍です。ここで書かれていることはハリウッドのデザスター映画を見るようにショッキングで、まさかこんなになってしまう（まさに地獄絵！）なんて信じられない世界なのです。

著者は環境問題のジャーナリストのマーク・ライナス（mark linas）。

原題：SIX DEGREES・・・Our Futur on a HotterPlanet（翻訳・監修：寺門和夫）。

著者は「専門家でない人に本著の説明をしようとするときに判ったことは温暖化で平均気温が2度、4度、あるいは6度上昇することが一体なにを意味することなのか、一般の人にはほとんど理解されていないという事実です。たしかに昼と夜の温度差が15度あったとしてもたいした差ではない。大抵の人にとっては昨日より６度暖かいとしても、この世の終わりなどではなく、家にコートを置いてきた方がいい程度の影響しかない。天気は変わりやすいのでそういうこともあるだろう。しかし、地球の平均気温が６度上昇することは全く別の話になる」そして「2度上昇すると、６度まで一気に上昇してしまう可能性がある」と述べています。

著者は環境学者ではありません。しかし、地球温暖化関連についての膨大な書籍や学会報告、政府機関、大学、各環境団体への取材を重ねており、この著作が空想科学小説でもなくハリウッド映画でもないリアルな現実からの未来を予見した警鐘の書の一つであることは間違いないと確信します。————それでは1度上昇から６度上昇までを、著作の抜粋から紹介したいと思います。

１度上昇・・・アメリカ西部は中世の温暖期の再来。長い旱魃に襲われる可能性がある。砂漠が動き始めるのだ。現在我々の肥沃な食糧庫となっている肥沃な土地に砂漠が広がる。アメリカで熱波によって牧草がとばされる一方、大西洋の反対側の農民たちは別の問題「極寒」にとりくんでいる可能性がある。キリマンジェロの氷は80％が20世紀に融解した。残り氷も2020年の間になくなる。氷河が消失するという事は、大量の融解水が下流に流れ大きな危険性を孕んだ脅威となる。・・・・・

２度上昇・・・私たちが飛行機に乗る。エアコンから排出された二酸化炭素は半分が海に行く。微妙なアルカリ性の海が炭酸化する。排出量がもっと増えれば、ほとんどの海が酸性化し、炭酸カルシウムを用いる海洋生物は生きられない。海の植物連鎖によりやがて植物プランクトンに影響。ヨーロッパの気温上昇、2003年パリ市民をおそった熱波により死者多数、この年は例年より気温が2.3度高かった。体温調節システムの崩壊から一万人の犠牲者が・・・・・

３度上昇・・・オーストラリアの火災が増加。世界でも取り分け乾燥した大陸なので現在でも森林火災がシドニー等の都市にも近づいている。北極については３度上昇した時点で海氷の80％が失われている。これもひかえめにみてのこと。氷の下にいままで眠っていた新しい地面が目を覚ます。

さらに融解がすすむ。ニューヨーク沿岸部の海面は25センチから１メートルの幅で上昇するだろう、おおきなハリケーンがやってくるだろう、大洪水が何度もおこるだろう・・・・・

４度上昇・・・世界中の海面水位は確実に0.5メートル以上上昇。アレキサンドリアの街は水没。150万人の市民が強制退去。ナイル河デルタでは広範な地域が海に侵食される。海岸地方から内陸に押し寄せる難民。海岸線が短くなる島嶼からなる国々。巨大な氷床が反応しつづけ、グリーンランドや南極の氷床が溶けて、25メートル！の海面水位の上昇（NASA）が避けられない。全氷床が崩壊すると、イギリスは丘の頂上だけ島のように点在する国となる。過去に平均気温が４度上昇した状態が続いていた時代には南極にも北極にも氷は存在していなかった。中国の農産物が40％減少・・・・・

５度上昇・・・ここまでくると、全く別の惑星が登場することになる。我われが知っている地球とは似ても似つかない星だ。氷床は南極から消え、熱帯雨林は焼失。海面が上昇し、沿岸の都市を飲み込み、内陸部まで海水が押し寄せる。人類は旱魃と洪水のために、縮小していく移住可能な地域へ集まる。内陸部の気温は今より10度以上も高くなる・・・・・

６度上昇・・・無酸素の海。壊滅的なメタン・ハイグレードの放出により、気候が著しく温暖化し海がまともに循環しない。生物の大量死の可能性。海底から放出されたメタンガスは空に向かって数100メートル吹きあがる。解放されたメタンガスは大気中で爆発。衝撃が周囲に伝播する・・・・・

以上、ざっと紹介しただけでも気が滅入ってしまいます。ただこれは著者の予測です。「1度から６度上昇になるかはわからないが、過去の歴史をもとにそうなったときの予測図」だと言っています。ティッピングポイントはすぐそこ。国際的な大規模な努力を著者と共に祈りたいと思います。

WARD理事　齋藤光弘　MITSUHIRO SAITO

若者の積極的参加が政治を変える

POSITIVE PARTIPATION OF A YOUTH CHANGES POLITICS IN JAPAN

地球環境の悪化が現実になってから久しいが、世界の指導者達はまだ経済発展に向かって行動している。今年のCOP21においても南と北の対決で混乱しているが、北でも富裕層と貧者層の差が大きくなり、飢餓状態の人達が増加している。

日本でも、地球の未来を考えない政治家、経営者や科学者が、地球の破滅に向かった後押しをしている。

WARDはニュースレター10号で、政治家の若齢化を提言したが、いよいよ夏の参議院選挙で18歳からの参加が決まった。その時、人類の未来を考えた投票が出来るだろうか。

戦後の教育は高校までひたすら知識だけを詰め込み、大学入試を行ってきた。そのため獲得した知識以外はほとんど考えることをせず、常識のない青年・成人が多くなっている。その結果、日本社会を動かしている政治家、経済人、科学者達は未来を考えない、目先の狭い専門分野で行動している。

東北大震災において福島原発が破壊され多くの人たちが住めない地域が広がっているが、その影響は100年続く。それにも関わらず、政治家と経済界は原発を再開し、住めなくなる地域を増やそうとしている。このように現時点のことしか考えられない人達が社会を動かしているのである。

教育の目的は社会で活躍できる人間を育成することであるが、そのためには子供の時から様々な体験学習・経験を経ないと、感性は磨かれないし、生命（いのち）を大切にする思考は生まれない。また将来を考える思考もできないし、臨機応変の発想も創造性も育たない。

人類社会の発展は科学がアリストテレス、ルネ・デカルトなどの自然哲学から始まったが、人間社会の豊かさに役立つ発見・技術が注目されてから自然観、物質観が変わった。

すなわち経済的に利用できる科学が重要視されることになり、科学者は分子レベルでの生命現象の解明も加わって、細かい分野の抜群の知識を持ちながら、精神的な領域に対する理解力を持たなくなってしまった。

人類が地球上の限られた物資の中で生活をする限り、予測と設計と制御は重要な事であることを忘れ、資源を浪費する科学になったのである。つまり、量子論以前の二元論的考え方で物質関係は理科系で、精神のことは文科系に分けたことが精神的破壊も地球環境の破壊も引き起こしたと考えられる。本来分けることができないことを分けてしまったことが偏った方向になったのである。

これからは文理融合が必要で、精神的なことも物理学が対象になることが明らかになった量子論がそのことを示唆している。まだ不明な点が多い脳の働きをそのままにして、解明されることだけを重視している科学を見直さなければならないと思う。その昔、寺田寅彦は全集第三巻・唯物論の中で“科学者が地球全体の生物の生存に関心がないことは、人類の破滅に近づくということである。科学者よ、思考力と哲学を持ち、ただ自然を分析して現象面だけを追求することをやめてほしい。”と述べている。

若者よ！知識を吸収することばかりに振り回されないで、生命の存続はどうしたらよいかを、わが国が伝えてきた“里山”に代表される持続可能な社会を維持することを主体に考えて欲しい。

地球の存続を左右するのは若者であることを、過去の歴史と現状から学んで、未来の歴史を作ることを期待している。

独協医科大学名誉教授 WARD副会長　永井伸一SHINITI NAGAI

2016年　申年に期待する事

WISHING THE MONKY YEAR OF CHINESE ZODIAC

年が改まりあっという間に桜の季節が来ようとしています。思い起こせば今年は暖かい三が日で始まり、地球温暖化への警鐘から新しい年が始まった気がします。

今年は申年ですが、そもそも十二支というのは中国で始まり、日本でも年や時間に使われてきました。十二支を動物に例えたのは庶民でもわかりやすくするためと言われていますが、今年の干支である申と言う言葉の意味は果物が熟して伸びるという意味があるそうです。また動物の猿だけに大変元気が良いとも言われ、株の世界では上下に荒れる年とも言われていますが、実際年明けの株価はだいぶ下げて始まり、また戻すなど乱高下が続きました。また反対にいやなこと、不幸なことが去る年とも言われ、昨年一月のパリでのテロから始まり、年末のパリ同時多発テロのような事件が今年は去り、平和の果実が熟して固まっていく年となるよう心から期待しています。

猿と言うと日光東照宮の三猿（見ざる、聞かざる、言わざる）が有名ですが、実はこの三匹の猿と言うモチーフはエジプトやアンコールワットにも見られ、シルクロードに乗って中国経由で日本に入ってきたという見解もあります。またインドやアメリカにも「Three Wise Monkeys」という概念があり、邪悪なもの

日光東照宮　三猿

に対して見る、聞く、言うことを戒めるもののようです。もっともこの東照宮の三猿も長い人生の幼少期における戒めとして彫刻されており、この他何枚もの人生の縮図を表した猿が他の場所に彫られているようです。今度私も日光に行った際には確かめてみようと思います。

申年に当たり私なりにこの戒めを解釈し、逆の意味での、見よう、聞こう、言おうという風に置き換え、何事もきちんと見極め、人の話をよく聞き、そして適格な判断で自らの意見を言える年にしていこうと考えています。

WARD事務局長　田中國智　KUNITOMO TANAKA

書籍紹介 BOOK REVIEW

「定常経済」は可能だ！

ハーマン・デイリー（話し手）、
枝廣淳子（聞き手）

岩波ブックレット
（岩波書店 No.914
￥520+ 税
2014/11）

安倍内閣はアベノミクスと称する経済拡大政策を押し進めていますが、成果は期待するようなものでなく、むしろ迷走しているようにも思えます。市民の側は不安を抱きながらも、「足るを知る」で対処している感じです。

この複雑な現実をどう捉えたらよいのか？これだと思えた参考書は、歴史的必然だとする水野和夫著「資本主義の終焉と歴史の危機」（集英社新書No.0730 2014/3）と、この「定常経済」でした。両者に共通する指摘は、すでに「世界には空きのスペースはない」であり、成長経済から定常経済への、思考の転換が必要になっていることに気付かされます。

著者のお一人枝廣淳子氏は、東大大学院で教育心理学を修め、必要から編み出した学習法で語学力を身につけたとする環境ジャーナリスト、著作・翻訳・同時通訳・啓蒙家であり、東京都市大学環境学部教授、さらにNGOや会社を経営し、組織運営の専門家としても活躍、最新刊の著書は、環境問題のオピニオンリーダーであるレスター・ブラウン氏との共著「データでわかる世界と日本のエネルギー大転換」（岩波ブックレットNo.943 2016/1）です。

枝廣さんはこの本で、経済学を環境、生活、倫理などの観点から論考されているH・デイリー氏の「定常経済」こそが、活動に不可欠な原理であると確信され、話し合われています。内容は、経済成長（拡大）が諸問題を解決し、豊かにすると一般に思い込まれているが、経済成長には+だけでなく、必ず一面（不経済成長）を伴うこと、先進国ではすでに成長を止めなければならない移行点（+→−）に達していること、いまや効率を上げればすむのではなく、まず総量を定め効率で対応すべきであること、また貧困などの克服は成長でなく、富の再分配が最良の策であることなどとなっています。

本書では、わが国が「定常経済」に移行しやすい位置にあることも指摘されていますが、現状は逆に向けられています。したがって「定常経済」を理解から政策へと変えるには、まず舵取り役を選挙で選び直さなければなりません。参院選挙が近づいています。投票には知識が不可欠、仲間で本書を読みあい、力をつけ合うことを期待しています。

山本禎紀　広島大学名誉教授WARD理事　SADAKI YAMAMOTO

アースデイ 2016　EARTH DAY TOKYO

アースデイは、地球に感謝し、美しい地球を守る意識を共有する日です。1970年に始まり、世界175か国、約５億人が参加する世界最大級の地球フェステバルです。東京でも毎年10万人以上が集います。今年は４月23日（土）24日（日）に代々木公園で開催されます。雨天決行です。是非ご参加ください。

URL:http://www.earthday-tokyo.org/

お知らせ　NOTICE

WARD総会開催　THE 25th WARD GENERAL MEETING

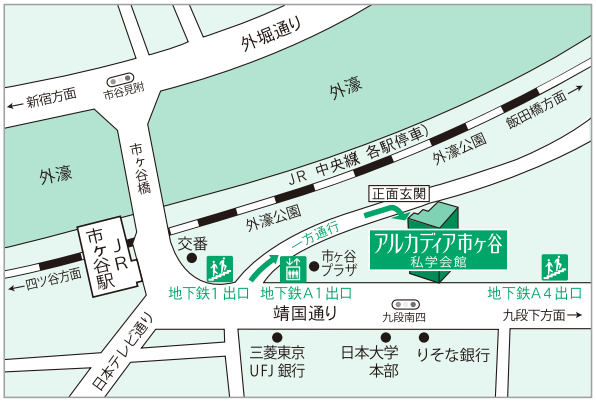
来る４月29日、第25回WARD総会を、下記の通り開催します。今回は議事終了後、地球温暖化を止める方策や実践活動について夫々活動されておられる情報を交換し、コラボできるような機会にしたいと企画しました。実りある楽しい会になりますよう、皆様のご参加をお待ちしています。

尚、準備の都合上、参加頂ける方は、４月15（金）迄に、はがき又はＦＡＸでＷＡＲＤ事務局（下記）にお申し込み下さい。

総会の参加費は無料です。懇親会費は1000円（当日）です。

記

＊日　　時：４月29日（金、祝日）13:30〜16:00
＊場　　所：アルカデイア市ヶ谷・私学会館　７階妙高
東京都千代田区九段北４－２－25
TEL：03-3261-9921　FAX：03-3261-9931
＊プログラム：13：10　開場
13：30　開会
会長挨拶
議長・書記選出
議事　1）2015度活動及び会計報告
2）2016年度活動計画及び予算案
3）役員改選
4）感謝状贈呈
14：10　パネルディスカッション：地球温暖化
15：10　意見交換　スローガン唱和
16：00　閉会
16：20〜懇親会　同会館内
＊当日の緊急連絡先　090-4754-6706 & 090-9340-2939



交通のご案内　地下鉄 有楽町線・南北線　市ヶ谷駅（1またはA1）出口から徒歩2分
地下鉄 新宿線　市ヶ谷駅（A1またはA4）出口から徒歩2分
JR 中央線（各駅停車）　市ヶ谷駅から徒歩2分

◆ 会費納入のお願い　MEMBERSHIP FEES ◆

２０１６年度会費納入の郵便振替用紙を同封させて頂きました。正会員の会費は1口（千円）以上、賛助会員の会費は1口1万円です。納入は随意ですが、ご都合宜しければお願い致します。尚、領収は振込時の領収証で代えさせて頂きます。

会費納入方法　次の口座へお振り込み願います

A. 銀行振り込み　みずほ銀行自由ヶ丘支店普通2286766
B. 郵便振替　00100-3-659238 加入者名WARD

WARD　47号（2016年3月20日発行）
発行人　渡辺英男　　定価150円
編集人　加藤正彦
WARD事務局　〒152-0003　東京都目黒区碑文谷5-4-21
TEL ０３－５７２１－１９９２　FAX ０３－５７２１－８３８３
http://www.ward-ngo.com